

Stereo

2009
December

12

増大特集

9人の評論家が選ぶ ベスト・バイ・コンポ2009

- ①トップモデルはこれだ
- ②集計詳細



〈特別企画〉

“オーディオグレード”を探せ！

高級カナル型

インナーイヤー・ヘッドフォンに迫る

ついに舞い降りた「ラシング・シンプ」と「トライゴン」DIALOG&MONOLOGの実体

今泉晃一

●Director
Rainer Reddemann

この10月に行なわれた東京インターナショナルオーディオショウ。フェューレンコーディネートのブースに展示されたいくつかの新製品の中でも、メインの試聴システムに組み込まれ、目を惹き付けたコンビがあった。「ダイアローグ」と「モノローグ」——トライゴンによるコントロールアンプとパワーアンプのフランク・シップ機である。満を持して、という言い方が当てはまる両機の実体を、はるばるドイツより来日の2人に語っていただいた。

今秋のショウで揃い踏みした 両機から受けた印象

今年のインターナショナルオーディオショウのフェューレンコーディネートにて、トライゴンの最上位モデルとなるセパレートアンプ、「ダイアローグ」と「モノローグ」が初めて揃い踏みし（ダイアローグは初登場）、これまで初お目見えのピエガのフランク・シップ、「マスター・ワン」（のプロトタ

イブ）を鳴らすのを聴くことができた。同じくフェューレンコーディネートが取り扱うオクターブのアンプで鳴らした時には、ダイポール特性を持つ同軸リボン採用のピエガ・マスター・ワンがふわっとした空気感を醸していたのに對し、トライゴンのフランク・シップ・アンプは音を前へ前へと押し出し、密度感と凝縮感のあるサウンドで熱く鳴らしていた。

そこで後日、トライゴンの創設者であるライナー・レッデマンとラルフ・コルムゼーのお二人にインタビューする機会を得たときに、まず最初にこんな質問を投げかけてみた。

——お二人はどんな音楽を好んで聴かれるのでしょうか。

R 大いに反映されていると思います。我々は好きな音楽を聴くためにアンプをつくっているのですから。

ただ、私の妻がクラシック音楽のファンであり、開発途中に家に持ち帰つて音を聴かせると、厳しい意見を言つてくれました（笑）。私も時々クラシックのコンサートに行きますが、それは

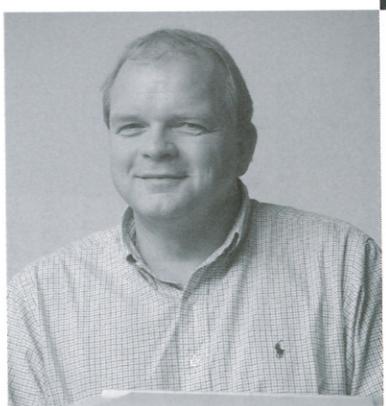
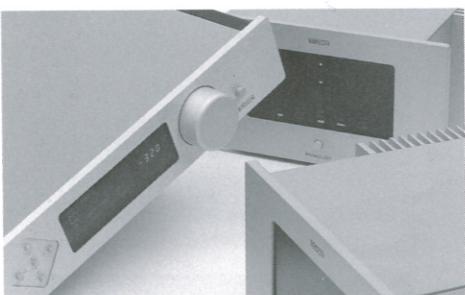
●Director
Ralf Kolmsee

photo : H.Yamamoto

R セパレートされた電源部の中には、

さらに独立した4つのパワーサプライが収められています。オーディオのプラグとマイナス用、マイクロプロセッサー用、そしてディスプレイ用です。このサイズに収めるために、すべてスピーカーと同じ筐体に納めますが、アンプと同じ筐体に納めるとどうしてもノイズが発生しやすくなってしまいまから、別筐体に納めることによってS/N比が大きく改善されています。

さくらに独立した4つのパワーサプライが収められています。オーディオのプラグとマイナス用、マイクロプロセッサー用、そしてディスプレイ用です。このサイズに収めるために、すべてスピーカーと同じ筐体に納めるとどうしてもノイズが発生しやすくなってしまいまから、別筐体に納めることによってS/N比が大きく改善されています。

R モノローグ（MONOLOG II）はシンプルに、モノーラル・アンプリファイアとロジック（理論）を足したもので。ダイアローグ（DIALOG II「会話」）はステレオを表す“D-I”（「2つの」）を示す接頭語であり、その名通りパワー・アンプと会話するというような意味です。

実はこのシリーズはまだ続きがありまして、近い将来——できれば来年あたりに新しいフラッグシップのフォノイコライザーオーを出す予定で、その名前は“アナログ（ANALOG）”にするつもりです。

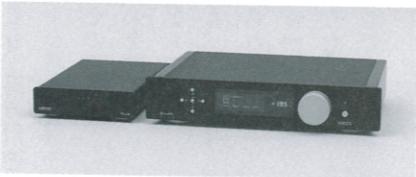
——これらフラッグシップのア

ンプに、コルムゼーさんはどんなイメージを持つっていますか。

K サウンドステージがとてもクリアで、ボーカリストがどこに立っているか見えるような印象がもつとも強かったです。

——では設計者であるレッドマンさん自身は、どんな音を目指したのでしょうか。

R まず、ナーバスな（＝気に障る）サウンドにはしたくなかったということ。ある周波数が強調されているような音——例えばベースがブンブンと鳴っていると、最初に聴いた時には「す



DIALOG、MONOLOGともシルバーバージョンの他にブラックバージョンが用意されている

「自分自身がまず満足できるアンプをつくってきましたし、これからもつくりていきたい」

——“モノローグ”“ダイアローグ”という名前にはどんな意味が込められているのですか。

我々は、『スペシャルな』音を目指してはいません

「ごい」と思いますが、3ヶ月後にはその部分がものすごく気になってしまったのです。ですから、我々は“スペシャルな”音を目指していません。音楽信号に何も付け加えないこと、そしてリスナーがアンプの存在を忘れてくれることが理想なのです。そうすればより音楽に集中できますからね。

——最後に、これらハイエンドの製品を完成させた現時点でのトライゴンの製品づくりのポリシーはどういうものでしょうか。

K 最初から目指していたのは、価格

に対し満足度の高い製品ということです。高品位のアンプをより多くの人々に届けたいという気持ちで、フラッグシップを発売した今でも、変わらず持ち続けています。

R まず言えることは、私が音楽を愛しているということです。常に高品質のアンプを目指すのは当然ですが、自分自身がまず満足できるアンプをつくりましたし、これからもつくりたいと思ってます。そしてそれが、トライゴンのアンプをつくる理由になっているのです。

